

チャットワーラック著、宇戸清治訳

『二つの時計の謎』

講談社 二〇〇九年九月

一九三二年、立憲革命直後のバンコク。有力者モンコン男爵の息子チャクラが傷害事件を起こした。バンコク警察要人外事課のサマイ警部はモンコン男爵から親の代の恩を着せられ、チャクラの嫌疑を晴らすよう要請される。サマイ警部は相棒ラオーと共に、事件の調査に乗り出した。

チャクラは理髪店の壁掛け時計を奪うために侵入し、そこに居合わせた店主を持っていた時計で殴りつけ、逃走を図った。壊れた壁掛け時計の針が示す時刻から、犯行は午後九時五十五分に行われたことが判明する。そして同夜、チャクラと共同経営していた輸入販売店の経営者が首吊り自殺を遂げていた。さらに翌朝には、運河で娼婦の溺死死体が発見される。死んだ娼婦はチャクラの懐中時計を持っており、恋愛関係の纏れから覚悟の入水自殺を図ったと思われる。ところが証拠品を確認していたサマイ警部は、水に沈んで止まった懐中時計が示す時刻に目を留める。その懐中時計の針は、チャクラが傷害事件を起こした午後九時五十五分を指して止まっていた。

午後九時五十五分。題名にもあるように、同時刻を指し示し

た二つの時計の謎が、本書『二つの時計の謎』のキーワードである。この奇妙な一致は単なる偶然なのか、それとも背後には別の真実が隠されているのか。一晚に発生した三つの事件が複雑に絡み合い、さらにチャクラを殺そうと企む中国人マフィアまでも登場する。怒りにまかせて冷静な判断力を失うサマイ警部は、上司とモンコン男爵、そして闇社会のボスから事件解決までの期限を区切られ、チャクラの命と自身の職をかけて窮地に立たされる。一方、相棒ラオーは数ヶ月前に発生した未解決の男女溺死事件を内密に捜査しており、モンコン男爵に疑惑の目を向けていた。サマイ警部と相棒ラオーは時に体を張り、時に頭を働かせ、これらの事件の謎に迫っていく。

チャクラの起こした傷害事件を調査するサマイ警部とラオーは、事件解決への糸口としてJ・H・フットレル (Jacques Heath Futelle, 1875.4.9-1912.4.15) による短編小説「完全なアリバイ」を参考にする。フットレルはタイタニック号と共に沈んだアメリカのジャーナリストかつ小説家である。「完全なアリバイ」では、深夜、衝動的に殺人を犯してしまった男チェイスが、犯行後に数キロ離れた歯科医院に忍び込んで時計の針を一時間戻す。その後、歯痛を訴えて歯科医を叩き起こし、治療を受ける。そして歯科医が眠りに就いた後、チェイスは再び忍び込んで時計の針を元に戻す。こうして犯行時刻のアリバイを巧妙に作り上げるのである(ジャック・フットレル、宇野利泰訳二〇〇九年、「完全なアリバイ」『思考機械の事件簿I』二六七―二九〇頁)。チャクラの起こした事件は単なる傷害事件であったのか。それともチャクラは「完全なアリバイ」のチェイスのように、アリバイ工作のために理髪店を訪れたのか。そうであ

れば、何のためにアリバイが必要であったのか。

また、三つの事件現場から得られる証拠品にも事件の謎を解く鍵が隠されている。壊れた掛け時計、使い古された二枚の腰布、小型の帳簿、水の乾いた跡が残っている懐中時計、そして陶器の破片。これらの証拠品が、それぞれ意外な真実を物語る。サマイ警部と相棒ラオーは証拠品を前に推理を展開させ、最終的に複数の事件を一気に解決へと導く。

サマイ警部に相棒ラオー、モンコン男爵、チャクラ、中国人マフィア、そして彼らを取り巻く女たち。これら登場人物間の人間関係も面白い。サマイ警部やラオーのモンコン男爵に対する憎悪の念、中国人マフィアと娼婦の間の真摯な愛。とりわけモンコン男爵の息子チャクラに対する歪んだ愛が、二つの時計の奇妙な一致を作り出したとする結末は予想外である。無慈悲なまでの冷酷さを備えたモンコン男爵は、本書に登場する様々な人物の中でも一際目立つ存在であろう。

タイ文学作品であるため、作品に描かれた衣食住からはタイの風情が感じられる。また訳者によると、当時の中国人居住区に暮らす人々の生態や、暗黒街を支配する闇組織についての記述の多くは史実に基づいており、ミステリーにリアリティを与えることに成功しているという。おそらく、そういったタイの事情に詳しい者は本書を余すことなく楽しむことが出来るであろう。しかし、タイ事情を知らない者にとっても、タイの雰囲気は十分に味わえるはずである。高床式家屋やクラベーンと呼ばれるタイの伝統的な着付け、熱々のおかゆと空芯菜炒めにジャスミンの香りを含む冷えた水カンフーやタイ式ボクシングによる格闘シーンは、タイ独特の描写である。

本書は「アジア本格リーグ」プロジェクトの第二弾として、タイのミステリー作品から選り抜かれた一冊である。原作はミステリー大賞を受賞しており、今、タイで最も面白いミステリー作品と言えるであろう。台湾・インド・韓国・中国・インドネシアのミステリー作品をも含む「アジア本格リーグ」は、馴染みのないアジアのミステリーに触れる絶好の機会である。各国のミステリーを読み比べるのも良い。ミステリーの新たな楽しみ方である。

(安永有希)